

《目次》

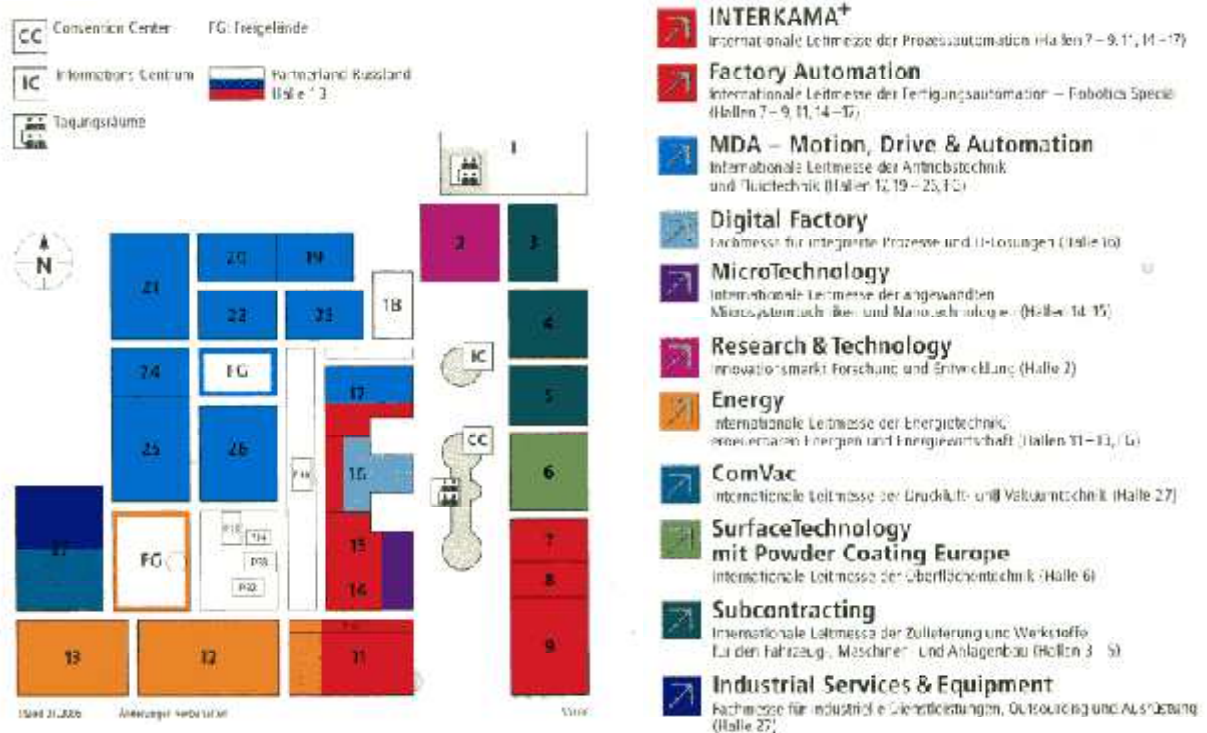
ハノーバー・メッセ視察・・・1～2 p
 セミコン・ヨーロッパ視察・・・3～4 p
 FPD 展視察・・・5 p

テクノセミナーの開催・・・6 p
 FPD 関連トピックス・・・7 p
 蠟梅 Now・・・8 p

ハノーバー・メッセ 2005 視察

世界最大の見本市ハノーバー・メッセが、4月11～15日に開催された。同メッセは、複数の専門見本市が同時期に、同一会場で開催される複合見本市であり、今回は世界65ヶ国より6,090社が出展し、205千人以上が訪れた。ハノーバーの人口が55万人であることから、会期中は別の街になるといってよい。会期初日の11日には、ロシアのプーチン大統領、ドイツのシュレーダー首相も現れ、広大な会場の中でも、2人の周りは黒山の人ばかりであった。

会場には、大型のパビリオンが30程度あり、通常の展示会の10倍の規模である(会場図参照)。11の専門見本市のテーマは、「ファクトリーオートメーション」、「モーション・ドライブ・自動化技術」、「デジタルファクトリー」、「マイクロテクノロジー」、「研究開発およびテクノロジー」、「エネルギー」、「圧縮空気および真空技術」、「産業部品および工業材料」他であった。



ハノーバー・メッセ会場図

NPOの活動主旨に沿ったテーマを中心に観たが、見本市の印象を一言で言うと「玉石混交」である。大手企業の目的が、「今後の方向性を示唆する最先端技術を競って展示する」というより、確立された市場に対して、役に立つ新製品を提示することにあると感じた。しかも、対象製品は、どちらかと言うと、機械系技術分野の占める割合が大きい。一方、中小企業の目的は、自社製品を展示して、大手企業の眼にとまることにあると思われる。中国、ロシア、インド、パキスタン、東欧諸国の展示はほとんどが後者の目的である。

以下、いくつかの分野について概要を紹介する。

- ・ 超電導：今回のメッセでは、Superconducting City と称するコーナーが設けられ、15社が参加。内容はすべて高温超電導（HTS）に関するもので、テープ線材や SQUID、応用技術を展示していた。超電導のデモとしては、超電導ループコスターや磁気浮上体験、超電導インダクションヒータ等が展示されていた。目立った展示は、Bi2223 線材で、すでに4～5社（American Superconductor 社、HTS-110 社、Trihol 社、European Advanced Superconductors 社等）が1,000～1,500m級のテープが販売できると主張しており、ほぼ一線にあるように見える。コストや信頼性の問題があるものの、これらテープを利用したマグネットも作られ始めている。
- ・ ナノテクノロジー：数社がカーボン・ナノチューブを中心としたナノ材料を展示。Nanotech と称する展示範疇にあっても、ナノ材料を作製するための、装置、部品ユニット等、枯れた技術を展示している会社も多い。この分野はどちらかと言うと低調。理由は、参加者が即戦力性を求める見本市の中で、例えばカーボン・ナノチューブは、半導体、燃料電池、超電導等、適用可能性はきわめて広いが、未だひとつとして当該応用分野での実用 No.1 候補でないことにあると思われる。
- ・ 燃料電池：“Hydrogen + Fuel cells” と称し、117 団体が一つのコーナーに集まるグループ展示がなされていた。10年前は、このテーマの展示が10件であったのが、2000年以後急激に増加しているとのこと。それを反映して、多くの人が集まっていた。この分野の特徴は、材料 コンポーネント システム システム応用の流れができており、会社の規模や特徴に応じて、守備範囲が異なるところである。小規模な会社は、材料やコンポーネント主体。3Mのような大規模会社は、すべての領域をカバーし、例えば、スクータ、携帯電源、住宅用電源等、具体的な用途に必要な仕様達成を目指している。

(株) 神戸製鋼所 宮武 孝之